平成二十八年六月
聞見会新聞　Vol.6

お念仏の会
聞
もんけんかい

安心してお念仏できる場所
聞見会

慈海の吉崎通信

第1回　コンビニ坊主、蓮如さんと暮らす

聞見会代表の慈海です。数年前二年間ほど深夜のコンビニでアルバイトをしながら生活していました。つまり「コンビニ坊主」でした。その後、後輩の会社を手伝うことになりコンビニバイトを辞め、ネット通販のお仕事をしていました。

ですが、先日その会社も退職し、四月一日から本願寺吉崎別院（ほんがんじよしざきべついん）に住み込みでご奉公することとなりました。いわば、寺男（てらおとこ）、住み込みで吉崎別院の雑務をする下男のようなものです。

さて、その吉崎といえば、蓮如さんです。浄土真宗第八代目の宗主（そうしゅ）にして、浄土真宗中興（ちゅうこう）の祖とも称（たた）えられる蓮如上人御旧跡地です。なぜ吉崎なのか、なぜ中興の祖

蓮如さんなのかを説明するためには、まずその蓮如さんの御文章（お手紙）を開いてみましょう。

文明第三初夏上旬のころより、江州志賀郡大津三井寺南別所辺より、なにとなくふとしのび出でて、越前・加賀諸所を経回せしめをはりぬ。よって当国細呂宜郷内吉崎といふこの在所、すぐれておもしろきあひだ、年来虎狼のすみなれしこの山中をひきたひらげて、七月二十七日よりかたのごとく一宇を建立して、昨日今日と過ぎゆくほどに、はや三年の春秋は送りけり。……

「文明第三」つまり文明三年というのは、西暦で言えば１４７１年です。ちょうど後土御門天皇、将軍足利義政のころで、室町時代から戦国時代に突入しようかという時代でしょうか。蓮如さん五十七歳のころです。

これに先立つこと長禄元年（１４５７年）、四十三歳で本願寺を継がれた蓮如さんは近江の教化を進められていらっしゃいましたが、寛正六年（１４６５年）延暦寺衆徒の本願寺破却によって、河内・近江等に移られて行かれました。その間幾度となく命を狙われることもあったと伝えられています。

そして、文明三年（１４７１年）に、ここ吉崎の地にお立ち寄りになられ、「すぐれておもしろき」この土地を拠点にし、お念仏の教えを伝え広めるべく、まるで虎や狼が住処にしていそうな荒れたこの山をひき平らげて、坊舎を建立されました。

その後、このお念仏の教えを求め、おびただしい数の人々がこの地に集まるようになります。多い時では一日に一万人弱の方が集まったそうです。遠くは東北地方からもお参りの方がいらっしゃったとか。

そして、それまで北陸の寒村でしかなかったこの吉崎の地は、瞬く間に裏日本最大の都市とまでなったそうです。

蓮如さんがこの吉崎の地に滞在されていらっしゃったのは、約四年ほどの期間でした。ですが、たったそれだけの年月で北陸はおろか東海から東北地方に至るまでこのお念仏の教えが広まっていかれたといいます。

思い出してください。この吉崎に蓮如さんが坊舎を建立する前までは、本願寺の本山は破却され、浄土真宗の本山としての拠点は無い状態だったわけです。本山さえもなく、その宗主が命からがら転々としていた時からわずか数年で、大げさに言えば日本全国に、御開山聖人（親鸞聖人）お示しのお念仏の教えが、広まっていかれたわけです。

蓮如さんは決して住み心地の良い場所に、安穏とされていらっしゃるような方ではなかったそうです。足には草鞋の痕が残るほど常に方々を歩き回り、決して高い壇上から語るようなこともなく、身分の高い低い構わずどんなものであろうとも、膝を交えて、「後生の一大事」について語っていかれたそうです。

ですから、越前加賀のあたりでは、蓮如上人のことを「蓮如さん」と親しみを込めて今でもお呼びしているわけです。

慈海の祖父も、祖母もそうでした。越前といえば吉崎のおひざ元、越前門徒といえば蓮如さんの御教化をいただいた門徒衆であります。年に一度は何が

あっても吉崎にお参りし、少しお金があれば、それをぜいたくに使おうか、それとも吉崎さんに持っていこうかと悩んでは、やっぱり蓮如さんにご奉公せにゃならんやろと吉崎に収めていかれた方々が、越前加賀には多くいらっしゃったそうです。

別でも書いている『念力門』のお話もそうです。「御本山から吉崎に門を賜った！そりゃ一肌脱がにゃぁ名が廃る」と、百名を超える門徒衆が結集し、身命を賭して歩いてその門を運ばれていかれたのも、蓮如さんに聞かされた、後生の一大事、往生極楽の道の御恩を、すこしでもこの身に背負いたいとの思いからでしょう。

吉崎は、そういうところであります。

浄土真宗中興の土地、往生浄土の真実を聞かせてくださったこの場所は、俗な言い方をすれば、いわばお念仏の聖地であります。

その吉崎の地にある、本願寺吉崎別院には、本堂とは別に中宗堂（ちゅうそどう）というお堂があります。蓮如さんがこの吉崎の地を退去される際に、形見としてご自身のお姿を写されたと伝えられる、「おかたみの御真影」様がこちらのお堂の中にいらっしゃいます。

この中宗堂は、昔は「蓮如堂」とも「おたまや」とも言われたお堂であります。今でも、この地に蓮如さんがいらっしゃって、今日もまた後生の一大事をたずね、お念仏をお勧めくださっているお堂であります。

進むべき道に迷い、自身の心に惑わされ、誰にも相談できないようなものを抱えた無数の人々が、この吉崎の地で、このおたまやで、蓮如さんと語らってこられました。そして慈海もその一人であります。

この吉崎の地は、慈海が慈海を慈海たらしめる、原点のような場所かもしれません。念力門に始まり、吉崎別院の柱一本、床板一枚、砂の一粒までにも、祖母をはじめ、無数の念仏者の先輩方がつぶやきこぼしていったお念仏がしみ込んでいます。

コンビニ坊主であった慈海は、その吉崎の地に、蓮如さんと共に暮らすこととなりました。

その、蓮如さんとの吉崎暮らしを、これからも少しずつこの紙面で、吉崎通信としてご報告していけたらと考えています。

他力の中の自力とは、凡夫の力みを申すなり

釋林遊（林遊@なんまんだぶつ）　著

浄土真宗は、実にシンプルなご法義である。シンプルであるから非常に領解しにくいご法義でもある。

そのせいか、後生願いの両親の下で育ったので、小学生の頃から法話を聴かされ――爺さん（父親）が、当時珍しいテープレコーダーを買い込んで聴聞を録音してあるいたのでリソースは豊富――るし、小学校五年生の頃には正信念仏偈は暗記していた。

爺さんは、「若いうちに信心もらわなあかん」とか「この世はわが身にあいに来たとこやぞ」と口喧しく言っていた。

なにしろ、ご信心を頂くには三千の聴聞がいるという真宗坊主の言葉を実践していた明治生まれの爺さんであったから、林遊は理屈は立つのだが実践の前には抵抗は出来ない。

もっとも「今晩聴いて今晩助かるのが御開山の教えやぞ」が晩年の爺さんの口癖ではあった。

爺さんの言う「わが身にあう」ということは、今にして思えば、真実を目指す生き方であるが、真実なるものを持たない林遊には意味不明の言葉だった。

当時は、お文（御文章二帖）の「この信心を獲得せずは極楽には往生せずして、無間地獄に堕在すべきものなり。」の文に懊悩した人が、よく爺さんを訪ねて来ていた。ある意味において林遊が「信心正因」というドグマ（教条主義）に反撥を感じるのは、爺さんがどれだけ本願の慈悲を言っても、領解できずに肩を落として玄関の戸を閉める婆ちゃんたちを見たせいでもある。

越前の俚諺では、

「他力の中の自力とは、いつも御恩が喜べてびくとも動かぬ信心が、私の腹にあるという、凡夫の力みを申すなり」

という言葉があるのだが、思い込みと、ご信心の違いめが判らず苦悩している人も多かった。

そんなこんなで、林遊が本物のなんまんだぶに出あったのは四十三の歳である。若い頃から、歴史上の人物の年齢に自分の年齢を重ねて時間や歴史を考察してきたのだが、思わず法然聖人の帰浄に間に合ったと思ったものであった。「順彼仏願故（かの仏願に順ずるが故に）」である。

爾来、慈海さんに言わせれば、現在の林遊は、信心デストロイヤーなのだが、私が拵えたわたくしの信心は妄想でしかないのであった。

本願名号正定業　至心信楽願為因
成等覚証大涅槃　必至滅度願成就

本願の名号は、正しく往生の決定する行業である。

その行法を受けいれた第十八願の信心を往生の正因とする。

信を得て如来と等しい徳をいただき、涅槃のさとりに至るのは、第十一願の功である。

ソクラテスは「無知の知」ということを論じたが、知っているものがあるからこそ、「無知

の知」ということを言いえたのである。知らないと言い切ることが出来るのは、知っているものがあるから言えるのであって、べたに凡夫とか無知という言葉を使う真宗坊主の逃避の言葉ではないのであった。

なんまんだぶ　なんまんだぶ
なんまんだだぶ

阿呆堕落偈

前川 五郎松 著

《な》　なむあみだ、真似（まね）もはげめば上手になれる、あとにゃだんだん本物になる。

《に》　憎まれ者、世にはばかると言うが、ほんとにそうじゃ、うらはこのように老いぼれて邪魔物になっても、まだまだ生きている、死にたくない。死なねばならぬことは分かっていても、死にたくない。　死にたくないが、死なねばならぬ、死なねばならぬが、死にたくない。これを繰りかえしているうちに、死なせて下さるお方がある。なむあみだぶつ。

《ぬ》　糠に釘、うらの念仏糠に釘、いくらうってもフラフラじゃ、ヘンななもんじゃヘンなもんじゃ。　待てよ、こんなこと言うのは、ヘンでないものがうらに出来ると思うとるからじゃ。

《ね》　念仏は爺々が称えりゃ盗みもの、親が称えりゃ光輝く。

念仏は浄土への種やら地獄の業やらとは、祖師聖人のお味わい、親の宝に手をかけず、来るにまかせて拝むだけ。

念仏は口でとなえりゃ呪文になるぞ、心でとなえりゃ神だのみ、出てくださるのを拝むだけ。

念仏は称え心に世話やくな、出るにまかせて、なむあみだぶつ。

寝ざめにも、称えやすき念仏なれど、親が留守じゃで口を割らない。

《の》　のんきな爺々も、夜の寝覚めに〝お前は何がために生きているのか、何を目的に生きておりたいのか〟と自問自答してみるが、よい返答は一つも出てこん。

それもその筈じゃ、うらが生きて居るのでないがやで。

御同行（おんどうぎょう）より
興禅寺さま報恩講にて（最終回）

小合あゆみさん　寄稿

※前回につづいて、小合さんの感話です。

〈二十四回忌法要〉

今から数年前、彼の二十四回忌法要がつとまりました。

わたしは、昔の仲間に会うのはあまり好きではありません。行こうと決めたのは当日の朝でした。ふつうの同窓会なら行かなかったと思います。

ご法事だから行かなければならないと思ってお参りしました。お葬式の日に、「清め塩なんかいらん」と言った後輩が、お坊さんとしてご法事を進めてくれました。

亡くなった後輩がわたしを阿弥陀さまの前に座らせてくれました。このご法事は亡くなった後輩を通して、わたしが生かされていることを気づかされる場でした。

同じメンバーが集まるとしても、同窓会という時間と空間より、阿弥陀さまの前に座る時間と空間のほうが、わたしの心は落ち着き満たされるのです。

わたしがお聴聞（ちょうもん）を続けているのは、お寺の時間と空間が私には大切で必要だからなのかもしれません。

〈局葬～信楽先生〉

わたしの記憶からはすっぽり抜け落ちているのですが、彼の実家でのお葬式のあと、局葬、つまり放送局の葬儀をしたのだそうです。

その局葬でご法話をしてくださったのが、先日ご往生なさった信楽峻麿（しがらきたかまろ）先生でした。信楽先生は当時、龍谷大学の文学部長で、わたしたち放送局の顧問をしておられました。そのご縁でご法話をしてくださったのです。

数年前、ある先輩が信楽先生と同席する機会があったそうです。

信楽先生に「昔、龍谷大学の放送局にいました。そのとき、現役で亡くなった後輩の局葬の際に、信楽先生からご法話をいただきました」と伝えると、信楽先生は「よく覚えている」とおっしゃったそうです。二十年以上前のできごとを覚えていてくださったことを、たいへんありがたく思いました。

わたしたちには様々な出会いがありますが、お念仏でつながっている出会いを不思議で、ありがたく思います。

〈お仏壇を迎える〉

ここに釋徹宗先生の著書『いきなりはじめる仏教生活』という本を持ってきました。このなかに「軸のある生活」というお話があります。

「生活の中に、居住空間の中に明確な軸を設定してみませんか。しかも、精神的なものではなくて、儀礼的なものです。どんなものでもいいんですよ、いわゆる〈壇〉を設けるわけです。

見えないけれど限りないいのちである仏さまをおまつりする。」とあって、図がかいてあったりします。ご本尊も自分で仏さまを描いてもいいし、「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」と字で書いてもいい。この居住空間の軸ができれば、嬉しいことがあればここで語りかけ、悲しいことがあれば告白し、苦悩があれば相談する。何か贈り物をもらったらここにお供えする。ときどきお花を摘んでここにお供えする。・・と書いてあります。お仏壇のある生活をなさっている方にとっては、きっといつもしている当たり前のことが書かれていると思います。

わたしは初めてこれを読んだとき、「そんなこと、できるわけない。この人、なんにもわかってない」と思いました。

長男の嫁が、主人の実家のご宗旨とは違うご宗旨のご本尊を置くことができるとは思えませんでした。広いおうちで、わたしの部屋があったり、誰にも邪魔されない場所があったりすれば可能かもしれませんが、我が家は狭くてとても浄土真宗のお仏壇を置くことはできない。そう思っていました。

父が亡くなり、四十九日までの、いわゆる中陰の間、実家ではなくて私の家に中陰のお飾りをして、お寺さんに七日七日のお参りに来ていただいていました。ご本尊はお寺さんにお借りしていました。四十九日が済むと中陰のお飾りは葬儀屋さんが、ご本尊はお寺さんが、持って帰ってしまいます。

わたしは自分の家にお仏壇、ご本尊をお迎えしたいと思うようになっていました。

けれども、小合の実家に行けば、日蓮宗のお仏壇があります。長男の嫁の立場で、浄土真宗のお仏壇を家にお迎えしたいとはなかなか言えませんでした。

母とも相談して、「だめでもともと」と開き直って、まず主人に「うちに浄土真宗のお仏壇を置きたい」と話しました。主人からは「俺はいいけど、実家に聞いてみないと」と返事がありました。

そこで主人の実家のご両親に話したところ、なんの反対もなく、すんなり話が通ったのです。もしかすると主人も実家のご両親も、お仏壇は亡くなった人が入る場所、と思っているのかもしれませんが、思いのほか、すんなりとお仏壇をお迎えすることができました。

亡くなった父は、いとも簡単に、我が家に阿弥陀さまをお迎えするというハードルを越えさせてくれました。

父はわたしに、わたしが安心して座れる場所を作ってくれました。

死んで終わりではないということを、亡くなった後輩も父親も、そして信楽先生も、私に教えてくれました。

〈往相還相〉

「往相還相」というおことばを、お聴聞のなかでお聞かせいただきます。

「往相」というのは、娑婆の縁がつきたとき、お浄土に往生させていただいてそこで仏さまに仕上げていただくのだとお聞かせいただきます。

私たちのご宗旨は、そこで終わりではありません。

仏さまとならせていただいて、

阿弥陀さまのおはたらきをお手伝いさせていただく、娑婆で苦しんでいる有縁の方々が阿弥陀さまのみ教えに出遇っていただくお手伝いをするという役割をいただきます。それが「還相」です。

亡くなった後輩も父も、わたしにとって「還相」の菩薩さまとして働いてくださっている。これはわたしにとって間違いのない事実なのです。

〈報恩講の歌〉

「報恩講の歌」という歌の二番の歌詞はこのようになっています。

「一人居てしも　喜びなば　二人と思え
　二人にして　喜ぶおりは　三人（みたり）なるぞ
　その一人こそ　親鸞なれ」という歌詞です。

これは（一人で阿弥陀さまの慈悲を喜んでおられる方は二人と思っていただきたい。二人で喜んでおられる方は三人と思っていただきたい。その一人とは私親鸞であると思ってください。）ということです。

「御臨末の御書」と呼ばれる親鸞聖人のお手紙をもとに書かれた歌だそうです。わたしはこの歌詞が大好きです。わたしにはいつも、阿弥陀さまと、そして仏さまとなられた親鸞さまや後輩や父や、大勢の方が一緒に生きてくださっているのだと感じることができるからです。「決してひとりにしない」とおっしゃってくださる阿弥陀さまのことばを実感できるからです。

〈顕浄土真実教行証文類　総序〉

　一番はじめに読ませていただいたご文は、親鸞聖人の主著である「顕浄土真実教行証文類」の「総序」と呼ばれる箇所の現代語訳です。

書き下し文を拝読させていただきます。

「ああ、弘誓（ぐぜい）の強縁（ごうえん）、多生（たしょう）にも値（もうあ）ひがたく、真実の浄信、億劫（おくこう）にも獲（え）がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網（ぎもう）に覆蔽（ふへい）せられば、かへってまた曠劫（こうごう）を経歴（きょうりゃく）せん。誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有（ちょうせけう）の正法（しょうぼう）、聞思（もんし）して遅慮（ちりょ）することなかれ。」

お聞きになったことがある方もおられると思います。

　この初めの「ああ」は漢字にすると「噫」と書くのだそうです。これは強く感動したり、驚いたりしたときに発する「ああ」なのだそうです。親鸞聖人が仏法に出遇えたよろこびがあふれた「ああ」なのです。

　仏法に出遇うことは簡単なことではありません。わたしも随分と時間がかかりました。

龍谷大学に四年間学び、手に届くところに仏法はあったのに、気が付きませんでした。後輩を亡くしたときも、仏さまを感じることはなかなかできませんでした。けれども、どんなときも阿弥陀さまからのおはたらきの中にわたしはありました。ようやく阿弥陀さまに気づかせていただき、自分を照らし出していただき、自分の浅ましさ、愚かさに気づかされるようになりま

した。
生きていていいのかと不安なわたしを支えてくださっている阿弥陀さまでありました。

〈竹中先生〉

最後にこの言葉をご紹介させていただきます。
これは真宗大谷派の竹中智秀先生のお言葉です。
「如来の　摂取不捨（せっしゅふしゃ）の心を学び、真実、自分自身のしたいこと、しなければならないこと、できることを、他人とくらべず、あせらず、あきらめず、していこう」
竹中先生はこの「摂取不捨」に「えらばず、きらわず、見すてず」と、振り仮名をふってくださっています。阿弥陀さまは、ある者だけを選ぶということをなさらない、ある者だけを嫌うということをなさらない、すべてのものを見守り続けてくださる、ということでしょう。

阿弥陀さまのたてられた願いは、わたしがそうではないという現実からたてられた願いだと聞かせていただきます。
さきほどの「総序」のおことばの中にもあった「摂取不捨」もそうです。
わたしの都合にあえば「この人はいい人だ」と選び、わたしの都合にあわなければ「この人はいらない」と嫌い、親しくなってもちょっとしたことで離れていってしまうわたしの現実があります。
阿弥陀さまはこんなわたしを捨てないとおっしゃってくださいます。そのおことばを素直に受け取ると同時に、少しでも阿弥陀さまの願いにかなうわたしになりたいと思います。

そして竹中先生はこのように続けてくださいます。
「自分のしたいこと、しなければならないこと、できることを、他人とくらべず、あせらず、あきらめず、していこう」
生きることに自信のないわたしに、このことばは輝いて聞こえてきます。
阿弥陀さまの「生き抜いておいで」のおことばと、この竹中先生のおことばは、わたしには同じことばと響いてきます。

わたしのいのちも、みなさんおひとりおひとりのいのちも、願われて生かされているいのちです。阿弥陀さまはわたしたちひとりひとりに、「生き抜いておいで、いつもいっしょにいるから」とおっしゃってくださっています。わたしたちはその仰せに従いながら、なんまんだぶつとお返事申し上げながら、生き抜いていきます。

〈真宗宗歌〉

「真宗宗歌」の三番にこのような歌詞があります。
「み仏（おや）の徳の　とうとさを　わがはらからに　伝えつつ　浄土（みくに）の旅を　ともにせん」
この歌をお同行のみなさんと歌うたびに、わたしはうれしくなります。みなさんとともにお念仏申しながら、仏さまになることを目的として生きているのだなあとしみじみ感じます。
今日のこのご縁を大切にしながら、お浄土への道をお念仏申しながら、皆さまとともに歩ませていただきたいと思います。

〈現代語訳〉

最後にもう一度、初めに読ま

せていただいた「顕浄土真実教行証文類　総序」のおことばを味わいたいと思います。

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生（せい）を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得（え）ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならないであろう。如来の本願の何とまことであることか。摂（おさ）め取ってお捨てにならないという真実の仰（おお）せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらってはならない。」

本日は尊いご縁をいただき、ありがとうございました。

合掌

（平成二十六年十一月三日　興禅寺さま報恩講にて）

小合さんの感話を纏めます

小合さんの感話「興禅寺さま報恩講にて」ですが、編集上の都合で三回に分けて掲載いたしました。

しかしながら、編集サイドの都合により、初回の感話が掲載されてから第二回目の感話が掲載されるまで、実に一年という時間が経過してしまいました。

感話をお寄せ頂いた小合さん、小合さんの感話を楽しみにしてくださっている読者の皆様に、大変失礼なことをした、と深く反省しております。

このたび、聞見会主宰の慈海君と話し合い、小合さんのご快諾を頂き『聞見会新聞特別号』という形で、小合さんの感話を纏めた号を七月に発行させて頂く手はずとなりました。

しかしながら、聞見会の予算の関係上、大変申し訳ありませんが、ご希望になられた方以外の印刷、発行は予定しておりません（ネット上からのダウンロードは予定しております）

小合さんの感話を印刷の状態で読みたい方は、お手数ですが聞見会の事務局までお問い合わせ頂ければ幸いです。

ご寄稿のお願い

「聞見会新聞」では、御同行様からのご寄稿をお待ちしております。

ご法話、感話、エッセイ、読み物、聞見会新聞の感想や、ご意見などでも結構です。ペンネームや匿名でもかまいません。

お念仏の同行の声を、ぜひお寄せください。

詳しくは釋慈海、もしくは「聞見会」のウェブサイト、ｆａｃｅｂｏｏｋページ等でおたずねください。

あなたの「言葉」をお待ちしております。

法話
御恩報謝のカタチ

釋慈海

如来の興世にあひがたく
諸仏の経道ききがたし
菩薩の勝法きくことも
無量劫にもまれらなり

慈海の生まれ故郷である、福井県の春江町にある針原という村には「放光寺」という浄土真宗本願寺派のお寺さんがあります。歴史の古いお寺でもなく、重要文化財があるわけでもありません。

どちらかといえば小さいひっそりとしたお寺です。有名な和上さんがいらっしゃるわけでもないですし、頻繁に楽しいイベントごとをやっているようなお寺さんでもありません。村の中心にひっそりとある、小さな小さな「村のお寺」さんです。

慈海が小さいころから、その「村のお寺」さんが村の中心にあることは当たり前の風景でした。小学校への集団登校では、このお寺さんの近くに集まって、このお寺さんの脇の道を通って学校への行き帰りをしたものです。

法要があれば祖母はいつも放光寺さんに出かけ、お説教（法話）を聞いて帰ってきていました。ことあるごとにお斎（とき）（法要後の食事）の準備を手伝い、掃除などの御奉仕にも祖母はよく行かれていたそうです。

その祖母に連れられて慈海自身も幾度となくお参りに行った記憶がかすかにあります。また逆に、毎月このお寺さんの御住職が「月参り」に家に来てくださり、お経をあげてくださっています。

この「月参り」の習慣は、特別な用事がある時以外ほぼ今でも毎月続いています。そして祖母が亡くなった時も、この放光寺さんの御住職が臨終勤行（りんじゅうごんぎょう）（いわゆる枕経）に駆け付けてくださいました。

さらには、私に得度を勧めてくださったのも、得度を受けることを決心した後に相談に乗ってくださったのも、得度を受けた後この僧侶としての生き方を今でも指南してくださっているのも、この「村のお寺」放光寺さんでありました。

この「村のお寺」さんの歴史はそれほど古くなく、どちらかといえば比較的「新しい」お寺さんであります。今の御住職はまだ三代目の御住職様ですし、初代の御住職様がいらっしゃる前までは、この地にはたまにお坊さんを招いて法座を開くための「説教所」があるだけだったそうです。

ですが、その昔一時期この地域は繊維産業が盛んになり、針原の村も機織りものでにぎわいました。そこで、村の方々が協力し合い、お金や土地を出し合って、お寺を造ろうということになったそうです。ただの「説教所」ではなく、いつも僧侶の方が在住し、いつでもこの村で仏法を聴聞できる場所を造ろうとなったそうです。

そこで、ちょうど警察官から転身し、得度を受けられたという熱心な僧侶を御住職として迎

え、放光寺という「針原村のお寺」が建てられることになったそうです。

お寺を建てるときには、村の人たちが総出で壁土を作ったと聞いています。今では少し古くなっていますけれども、柱はしっかりと重い屋根を支え、壁土もしっかりと外の雨風から中を守っています。

慈海が得度を受けた後、お掃除や御荘厳（おしょうごん）（仏具などの飾りつけ）を手伝わせてくださるのですが、ありとあらゆる仏具や小物に至るまで、聞いたことのある昔の村の方々の名前がしっかりと記されていたりします。

まさに、このお寺は、村の方々が仏法を求める気持ちで建てられ、お浄土を願う思いで飾られ、お念仏を相続していくために維持され続けた、そんな仏徳讃嘆、御恩報謝の思いがカタチとなった場所であります。

歴史の古い、大きな、立派なお寺さんはたくさんあります。門構えも素晴らしく、塀も高く、境内からは威厳さえも感じるお寺さんというのは、たくさんあります。

それに比べ、この「村のお寺」放光寺さんには、山門はおろか、境内を取り囲む塀もありません。ですから、敷居もなにもありません。誰でもふらりと境内に入っていけます。

放光寺さんの脇道を歩けば、本堂の中でジャージ姿でラジオを流しながら掃除されていらっしゃる御住職の姿を見かけるときもあります。坊守様が草むしりをされている姿や、畑で農作業をされている姿を見かける時もあります。もちろん決してきれいな恰好ではありません。

泥だらけ、草だらけ、額に汗を流されているそのお姿は、決して外向けのお姿ではありませんが、これほど尊いお姿はありません。

なぜなら、この村の方々の御恩報謝の「カタチ」を、身を賭して守ってくださっている姿だからであります。

ですから、慈海はこの放光寺という「村のお寺」が誇りであり、自分の生まれた村にこのお寺さんがあるということが、自慢なのです。仏徳讃嘆、御恩報謝が、「カタチ」になったこのお寺は、決してほかのどの立派なお寺様よりも、たとえ御本山であったとしても、引けをとるお寺さんではありません。

お寺の柱一本も、畳一枚も、すべて過去の先人方の御恩報謝が「カタチ」になったものです。

そして、その柱に守られ、その畳の上で、今日も私が御恩報謝のまねごとをさせてもらえる。

そこは、安心して腹いっぱいお念仏ができる場所でありました。そして、お寺とは、そういう場所でありました。

そのお寺の真ん中には、阿弥陀如来様がいらっしゃいます。村の中心のそのまた中心に、いつも休むことなく、二十四時間三百六十五日、何も言わず、静かにただ立ち続けていらっしゃいます。日照りの日も、雪積もる凍えるような日も、雨が降ろうと風が吹こうと、日の高い時も村の方が寝静まった深夜であっても、ただただ静かに立ち続けていらっしゃいます。

安心せいよ、そのまま来いよと、そっと右手を上げ、左手で添えて、前に座り誰にも言えないこの胸の内を、何も言わず黙って聞いてくださります。ここでは、お念仏をしても笑われることはありません。誰にも聞かせられないような懺悔（ざんげ）であっても、一人かみしめる喜びで

あっても、安心して、この如来様の前でさらけ出すことができます。そんな場所が、村の中心にある。安心して、この身の往くすえ、後生をたずねることができる場所がある。それは、とても幸せなことかもしません。お寺は、仏法を弘（ひろ）める場所と思われがちでありますが、実は仏法が弘まったからこそ、このお念仏の教えが弘まったからこそ、存在しているのでしょう。

今日いただきましたご讃題は、御開山親鸞聖人が示してくださいました『浄土和讃』より、仏説無量寿経の意（こころ）を顕してくださいました『大経讃』からの一つです。そのご讃題でいただきました通り、この私のところに、仏法が、このお念仏の教えがいたり届くことは、「無量劫にも」ありえないことでありました。しかし、お念仏の教えを聴き、お念仏をその耳に聞いてこられた無数の方々の手によって、今この私はその教えを相続し、安心してお念仏できる場所を賜っています。それはひとえに人々の力でもあり、その念仏者方のハタラキはそのまま、如来様の用（ハタラキ）が「カタチ」となった場所と味わうことができるのではないでしょうか。

そして、いつも日常の生活のなかで見過ごしてしまいがちですけれども、そんな場所が、実はこれを読んでくださっているあなたのそばにも、あなたを生み、育まれた故郷（ふるさと）にも、きっとあるかもしれません。もし、それに気づいたら、そっとその手を合わせて、お念仏されれば、その無数の思いに応えることになる、ことになるのかもしれません。

最後に、蓮如上人からのお手紙を御一緒にお聴聞いたしましょう。

そもそも、毎月両度の寄合の由来はなにのためぞといふに、さらに他のことにあらず。自身の往生極楽の信心獲得のためなるがゆゑなり。しかれば往古より今にいたるまでも、毎月の寄合といふことは、いづくにもこれありといへども、さらに信心の沙汰とては、かつてもつてこれなし。ことに近年は、いづくにも寄合のときは、ただ酒・飯・茶なんどばかりにてみなみな退散せり。これは仏法の本意にはしかるべからざる次第なり。いかにも不信の面々は、一段の不審をもたてて、信心の有無を沙汰すべきところに、なにの所詮もなく退散せしむる条、しかるべからずおぼえはんべり。よくよく思案をめぐらすべきことなり。所詮自今以後においては、不信の面々はあひたがひに信心の讃嘆あるべきこと肝要なり。それ当流の安心のおもむきといふは、あながちにわが身の罪障のふかきによらず、ただもろもろの雑行のこころをやめて、一心に阿弥陀如来に帰命して、今度の一大事の後生たすけたまへとふかくたのまん衆生をば、ことごとくたすけたまふべきこと、さらに疑あるべからず。かくのごとくよくこころえたる人は、まことに百即百生なるべきなり。このうへには、毎月の寄合をいたしても、報恩謝徳のためとこころえなば、これこそ真実の信心を具足せしめたる行者ともなづくべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

なんまんだぶ　なんまんだぶ
なんまんだぶ

聞見会について

聞見会は、浄土真宗本願寺派僧侶 釋慈海 が代表を務める、お念仏の会です。

「安心してお念仏ができる場所がもっとあったら」という思いから、この会を立ち上げました。お念仏は易行（簡単な行）と言われますが、現代社会でも果たしてそうでしょうか。

「周りの目が気になってお念仏できない」
「宗教というだけで白い目で見られる」
「お寺はどうも敷居が高くて入りづらい」
「仏教というのはどうも型ぐるしくて難しそう」

そんな声をよく耳にします。

その昔、越前の地ではお念仏を称える方がいらっしゃったら「ありがたい方やなぁ」とほめられたそうです。どの家からでも朝晩にはお勤めの声が聞こえ、週に一度は法座に足を運び、月に一度は別院へ、年に一度は御本山へという方も多くいらっしゃったと聞きます。日常の中に仏教があるのではなく、仏教の教えの中に日常がありました。

死ぬことは、安楽国、西方極楽浄土に生まれ、仏に成ることであり、それは悲しく、寂しくとも、しかしおめでたいことでもありました。お浄土がリアリティをもってすぐそばにありました。生きることは安楽の世界への道すがらであり、生きる苦悩がそのまま、如来に遇う「道場」でありました。

しかし、いつしか「賢く」なってしまった私たちは、その素晴らしい世界を、破壊していってしまってはいないでしょうか。生きることの目的が、いつしか生きる満足を求めるだけになってしまい、死を否定し、死を「空しい」ことにしてはいないでしょうか。生の行きつく先が、「空しい」ことであるならば、それはつまり、生きているこの現場も「空しい」ことにはならないでしょうか。

決して生死の現場の不安というものを、自らの力で消し去ることはできませんが、しかし、その「生死」に意味があったと聞かされるとき、この「生死」の現場が、「安心して不安を生きる」場所になっていくのかもしれません。

安心してお念仏を聞ける場所、それは、汚く、醜く、みっともなく、なさけなく生きて生きて死んでくことができる場所であります。

綺麗事ではないこの「生死の現場」で、どうぞ一緒に、「そのまま」のおすくいを聞くことができる場所を作っていけたらと願い、この会を運営しております。

聞見会代表 釋慈海 拝

なんまんだぶ

おしらせ

次号予告

次号のご法話は、本願寺派布教使小林顯英師からの書き下ろしご法話を掲載予定です。次号発行時に郵送をご希望の方は、聞見会事務局までご連絡ください

（事務局への連絡先は、奥付に記載してあります）

聞見会念仏会（もんけんかいねんぶつえ）

昨月に続き、今月の聞見会念仏会の開催もおやすみいたします。主催者都合で恐縮です。

恐らく再来月（八月）までおやすみすることになると思います。

ですが！　九月からは再開を計画しています。念仏会の形式（開催ポリシー）を明確にして、長く続いていくような会座にしたいと思います。

それまで、もし「何言ってんだ！てめぇがいなくたってお念仏はどこだってできるんじゃぼけかすー！」と頼もしい気概をお持ちのかたは、どうぞ、ぜひとも、それぞれで開催されても素敵と思います。　ひとり念仏会だって最高じゃん？

ということで、今後の聞見会自体の運営も含めて、仕切り直したいと考えていますので、しばらく慈海に時間をください。

安心してお念仏腹一杯できる場所をめざして。

なんまんだぶ

会計報告

平成二十七年度会計報告

収支纏め：平成二十八年四月

聞見会会計担当・山田正之

【収入の部】

御懇志	￥41000
慈海持ち出し	￥20000
計	￥61000

【支出の部】

新聞発行費用	￥7375
交通費	￥200
レンタルサーバー・ドメイン代	￥8240
諸雑費	￥4320
計	￥22265

【繰越金】

2016年4月1日現在

￥38735

御懇志（寄付）を下さった方に、この場で御礼を申させていただきます。

ありがとうございます。

聞見会代表　慈海 拝 合掌

ミニコラム
今日も念仏腹一杯

蓮如さんのいらっしゃる中宗堂（ちゅうそどう）は虫が多い。正確に言えば、虫の死骸が多い。

朝支度のために中に入ると、昨日きれいにしたはずが、なぜかたくさんの死骸が落ちている。

おあさじの時、蓮如さんの前に座ろうとしたら、さっきはいなかった蝿が一匹たたずんでいる。

「ごめんちょっと場所譲ってください」

と手で払っても動かない。死骸かと思ったら、まだかすかに動いてる。

臨終勤行になるんかもね、よかったなぁと、蝿のとなりでお勤め。

読経後、御文章はハエの方に向かって拝読することに。ああ、こいつはあれだ、慈海が聞かせるつもりが聞かされた。

御文章箱を閉じ、そっと息を吹きかけると、こと切れていた。すまんこっちゃ、あんがたいことやな。

なんまんだぶ なんまんだぶ
なんまんだぶ

聞見会へのご寄付について

「聞見会」は、皆様の御懇志（寄付）によって運営されております。ご寄附は、左記口座へお振込みください。大切にお預かりしまして活用いたします。

◆振込先◆

ゆうちょ銀行
記号：13310
番号：54152221
なまえ：モンケンカイ

※銀行からのお振込みの場合は左の口座へお振込みください。

店名：三三八（読み サンサンハチ）
店番：338
種別：普通預金
口座：0541522

聞見会新聞 第六号
平成二十八年六月二十六日 発行
発行 聞見会
発行人 釋慈海
編集 釋慈海・山田正之

この配布物および聞見会についてのお問い合わせは、左記までご連絡ください。

［住所］
〒919-0476
福井県坂井市春江町針原20-31
聞見会 釋慈海 宛
［電話番号］
090-3295-8969（釋慈海）
［メールアドレス］
info@monken.org

※聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶の釋慈海が主宰する聞法の会です。

※本誌はフリーペーパー（無料）です。聞見会員ならびに賛同してくださっている方々の御懇志とご協力によって発行しています。

合掌
なもあみだぶつ